Osaka University Knowledge Archive

Title	共同出版される児童書 : ベナンの作家・編集者B. ラリノン・バドとEditions Ruisseaux d’Afriqueの挑戦
Author(s)	村田, はるせ
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2015, 26, p. 99-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72972
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

共同出版される児童書

― ベナンの作家・編集者 B. ラリノン・バドと Editions Ruisseaux d'Afrique の挑戦 ―

村田　はるせ

0. はじめに

ベナンを含む西アフリカの、かつてフランスの支配を受け、現在もフランス語が公用語や教育言語として使われ、主要な書き言葉の地位を占める国々では、本に触れることができるのはごく少数の豊かな階層の子どもだけである。ただしそこでは、ほぼすべての本がフランス語で書かれ、おもにフランスからの輸入である。ここで述べている地域とは、1895 年以降仏領西アフリカ(Afrique occidentale française：以下 AOF)として編成された、現在のベナン、ブルキナファソ、コートジボワール、ギニア、マリ、ニジェール、セネガルと、1919 年に独領からフランスの委任統治領とされたトーゴである。本稿の目的の 1 つ目は、上述のような状況を作り、維持してきた要素を、ベナン共和国（以下ベナン）に焦点をあてながら整理することである。2 つ目は、ベナンの作家・編集者ベアトリス・ラリノン・バド(Béatrice Lalinon Gbad：以下ラリノン・バド)と、彼女の児童書[1)]専門の出版社 Editions Ruisseaux d'Afrique（以下 ERA）の活動に注目し、アフリカの出版社が児童書を出すことの意味を考えることである。

本稿の構成は次のとおりである。1 章では、子どもと本の出会いを妨げる要素についてみる。まずこの地域全体について、フランス語が主要な書き言葉である理由と国内出版の状況をみる。次にベナンに注目し、家庭の経済状況と子どもの読書の関係、図書館等の不整備という課題についてみる。ここからは、ベナンを含むこの地域の子どもの読書環境や児童書出版が現在も旧宗主国フランスとの関係に依存しているさまが浮かび上がるはずである。そこで 2 章では、こうした状況下にある ERA の出版事業の特性と

---

1) 「児童書」はここでは幼児から 15-16 歳までの子ども向けに書かれた、フィクション・ノンフィクションの本をさす。フランス語文献では"livre pour enfants"、"livre de jeunesse"などとされる。本稿では、このうち絵本、小説、詩、戯曲、伝承の再話などは「児童文学」とすることもある。これはフランス語文献では"la littérature de l' enfance et de la jeunesse"とされるものである。同じく、絵本は"album illustré"などと記述される。

課題をみる。ここでは ERA がアフリカ内での共同出版を通して経営の持続をはかり、主体的な出版を維持しようとしていることがわかるはずである。3 章では、ラリノン・バドの出版の意図や構想を筆者が実施したインタヴューも参照しながら探り、それらが ERA の本にどのように読み取れるかを考察する。最後の 4 章では以上から、アフリカの出版社による児童書出版にどのような意味があるかをまとめる。

1. 子どもと本の出会いを妨げる要素

アフリカ文学研究者の楠瀬佳子は、アフリカ諸国で子どもが本に触れられず、国内出版の本も少ない理由として以下の要素をあげている。「書籍のマーケットが非常に少ない。各国とも非識字率が非常に高い。貧困・失業率が高く、収入が低い、著作権侵害、違法コピーがまかり通り、教科書の出版が低調。図書館の不備。出版社への国からの財政援助が低い」(楠瀬 2011：289)。補足すると、西アフリカの旧仏領諸国の場合、一般に入手できる本は子どもが日常使う言語とは何の関わりもないフランス語である。この地域ではこの言語の識字能力がなければ読書はほぼ不可能である。また違法コピーの本が氾濫しているのは、書店の本の多くが高価な輸入本だからである。子どものために教科書を入手したい貧しい保護者は、安価なコピー本を購入するのである。しかしこれによって国内出版社や書店の経営は圧迫される [2)]。子どもが本に出会えない背景には、複雑にからまる要素がある。以下ではいくつかの要素を取り上げ、子どもがどのように本から隔てられているかをみる。

1.1 西アフリカの旧仏領諸国の課題

1.1.1 独立後も継続して使用されるフランス語

ベナンの都市を歩くと標識や看板はフランス語で書かれ、フランス語の流暢な話者にごくまれに出会ういっぽう、多くの人は外国人とコミュニケーションをとる場合にだけフランス語を、しばしば不自由して話す。家庭での会話や商売の場、長距離移動の車中ではフランス語はそれほど耳にしない。アフリカ文学研究者の砂野幸稔はこうした情景は多くのアフリカ諸国で見られるとし、そこでは「英仏語などの旧植民地宗主国の言語が、第一言語話者がほぼ皆無に近いだけでなく、第二言語としてさえ国民の一部にしか

---

2) 筆者はセネガルで、教科書の海賊版が書店経営に与える打撃について、書店員から聞き取ったことがある(村田 2013)。

普及していないにもかかわらず、事実上唯一の国家の公用語として、行政、教育をはじめとする社会のほとんどすべての公的分野を支配している」(砂野 2009a:34)と述べている。

こうした状況の背景には、植民地期の言語政策や教育を通してアフリカ人に植えつけられた、フランス語への意識があると考えられる。フランス人のアフリカ文学研究者ムラリスによると、上述の AOF での現地住民向けの教育制度は、1903 年に AOF 総督ルーム(E. Roume)の政令が示した原則に従って設計された。それは「なにより、実際に即した目的をもち、したがって植民地制度をよく機能させるのに必要な下級の人材の養成を主要な役割とするべき」(Mouralis 1984:80)教育であった。このためその内容は「植民地状況への批判意識をもたせるかもしれない知識や方法論を獲得させない」(Mouralis 1984:81-82)ものであった。取得できる資格も、フランス本国と同等ではなかったうえ、この教育を施されるのは、厳選された優秀な生徒のみであった(Mouralis 1984:65)。

同時にフランスは、アフリカ植民地での教育、行政、報道においてフランス語のみの使用を義務づけた(Mouralis 1984:94-95, 111)。学校内でも母語であるアフリカ言語の使用は厳しく禁じられた[3)]。ムラリスはこうした言語政策と植民地教育は、アフリカ文化とヨーロッパ文化の関係に関する一定のイメージを生徒に、さらには生徒を介して一般のアフリカ人に持たせる「イデオロギー」として機能したとする(Mouralis 1984:94)。ケニア人の作家グギ・ワ・ジオンゴは、植民地の経済的・政治的支配は武力によっては完全にはなしえず、被支配者の精神世界の支配が必要であったとし、支配者の言語を通した被支配者の言語の支配が、この精神の支配を決定的にしたと述べた(Ngũgĩ 2005:16)。仏領アフリカのとくに知識人エリート層も植民地の協力者となる教育を受けさせられるなか、フランス語の特権的地位、学校で教え込まれたフランスの価値観によって精神世界を支配され、フランス語とフランス文化の優位を受け入れていったと考えられる。英領では、英語が優位におかれつつ、スワヒリ語などいくつかの言語は行政言語として整備されたのに対し、仏領でアフリカの言語がそのように扱われることもなかった(砂野 2009a:39)。こうして 1960 年にいっせいに独立した旧仏領諸国には、「アフ

---

3) ムラリスは学校で母語が禁止された体験を描いた例として、コートジボワールの作家で、1920-30 年代に植民地教育を受けたダディエ(B. B. Dadié)の、1956 年出版の自伝的小説『クランビエ(*Climbié*)』をあげている(Mouralis 1984:95)。ここには、「シンボル(symbole)」と呼ばれた、違反者に手渡される目印を使った懲罰システムが描かれている。

リカの言語に比してフランス語に優位を与える二言語併用状況」(Mouralis 1984:95)が残され、アフリカの言語は行政・教育機構から排除されたのである。

フランス語の使用はまた、独立後もフランスと緊密な関係を維持しなければならなかった諸国にとっては必然であったと考えられる。第二次世界大戦後、フランスの「海外領土(territoire d'outre-mer)」となったアフリカの植民地では、アフリカ民主連合(Rassemblement démocratique de l' Afrique :以下 RDA)を中心に、フランス本国の市民と同等の権利や自治拡大を求める、海外領土全般に及ぶ運動が生まれた(Ki-Zerbo 1978:507/中村 1994:151-153)。しかしこの運動は、フランス共産党の協力を受けているとして、1950 年までに大弾圧を受け、その結果 RDA 代表のコートジボワール選出議員ウフエ＝ボワニ(F. Houphouët-Boigniy)は、RDA の路線を親フランスへと反転させた。さらに、その直後にアフリカ人として初めてフランスの大臣に就任した彼は、ドフェール法（基本法）の立案に関わった。1956 年に採択されたこの法に盛り込まれたのは、彼がかねてから主張していた各領域の分権化であった(Ki-Zerbo 1978:509-511/中村 1994:155-156)。海外領土のアフリカ人政治指導者たちは、連邦としての独立という構想ももっていたが、最終的には「バルカン化(balkanisation)」と呼ばれる個々の独立へと向かったのである。諸国はフランスからの経済援助が独立後も継続することを望んではいたが(平野 2002:295-298)、この独立の形態はフランスとのより強い連携を要するものであった。

しかしながら独立時においてもフランス語は一般住民にはほとんど普及していなかったという(砂野 2009b:127)。砂野は、多数のアフリカ諸国には、旧宗主国の言語が公用語として社会の公的分野を支配し、国民のほうではその言語を十分に読み書きできないという状況があるのに、これに対する言語政策は不在の場合が多いとしている(砂野 2009a:34)。現在のベナンでもフランス語の読み書きが十分にできるのは少数のままである [4]。

1.1.2 国内出版社の停滞とフランスの出版社への依存

サハラ以南アフリカ全般にいえることだが、国内出版社には児童書を出版し、国内外

---

[4] 「世界子供白書 2014 年」教育指標は、ベナンの 15～24 歳の人口の識字率を男 55%、女 31%と示している。ただしここでの識字率は「日常生活についての簡単な短文を理解できる」程度を意味する。(http://www.unicef.or.jp/library/toukei_2014/m_dat05.pdf (2015 年 1 月 8 日確認))

に配本する十分な資金力はない。フランス人のコミュニケーション科学研究者ピナスによると、1960 年のアフリカ大陸全体の出版数は、世界で出版された本 364,000 冊のわずか 1.4%の約 5,000 冊にすぎなかったが、1990 年代になっても世界の出版数に占めるアフリカ出版の本の割合はほとんど変わらなかった(Pinhas 2005:74)。サハラ以南アフリカでは、現在も販売されている本の 90%は先進国からの輸入本である(Pinhas 2005:75)。

西アフリカの旧仏領諸国には、コートジボワールの CEDA(Centre d'édition et de diffusion africaines : 1961 年創設)や、セネガルの NEA(Nouvelles éditions africaines : 1972 年創設)など、独立後まもなく誕生した出版社もある。だがいずれもフランスの大手出版社の出資や支援なしには運営が不可能である(Pinhas 2005:77-78)。それでも、政府が小学校教科書を国内の出版社から買い取っていたコートジボワールでは、CEDA と、NEI のコートジボワール社から発展した NEI (Noubelles éditions ivoiriennes : 1992 年創設)に資金力があり、この地域では児童書出版数の多さで知られていた(Pinhas 2005:78)。しかしピナスによると、コートジボワールを除いてこの地域では、確実な収益を生む教科書出版市場がフランスやカナダのケベックの出版社に掌握されており、それが国内出版社の経営困難の原因になっている(Pinhas 2005:74)。先進国の出版社が利益を横取りしてアフリカの出版を妨げ、アフリカの出版社はますます先進国に依存せざるをえない構図があるのである。CEDA と NEI にしても、2011 年まで 10 年続いた内戦により大きな打撃を受けてしまった。

1.2 ベナンの子どもの読書環境の課題

1.2.1 家庭の経済状況と子どもの読書の相関関係

子どもと本の出会いは家庭の経済事情にも阻まれている。一般に本は高価で、購入が困難である。ベナンでは、情報管理技術者ソノンによると全産業一律最低保障賃金は 1 か月 31,625CFA[5]で、保護者は本を買う余裕はないという(Sonon 2013:7)。彼の調査も、子どもの家庭が属する社会階層と読書習慣には相関関係があることを示す(Sonon 2013)。ベナンの経済上の首都コトヌ(Cotonou)で、初等教育基礎課程 1 年目(CE1)から

[5] CFA は西アフリカ通貨同盟(Union Monétaire Ouest Africaine:UMOA)加盟国の共通通貨。UMOA は 1962 年創設。ベナン、ブルキナファソ、コートジボワール、ギニアビサウ、マリ、ニジェール、セネガル、トーゴが加盟する。ユーロとの交換比率は固定で、100CFA は 0. 15 ユーロ、1 ユーロは 655.95CFA である。

後期中等教育 1 年目(seconde)（概ね 8～16 歳）[6] にあたる公立・私立学校生 500 人を対象に行ったこの調査では、1 か月に何回、図書館や学校図書室を訪れるかが尋ねられた。その結果、こうした図書施設を訪れたのは 2 割のみであった。いっぽう、頻繁に通っていたのは上級公務員、医師、司法官、弁護士、中等教育以上の教師、外交官、援助機関関係者、企業経営者、技術者、インド・パキスタン・レバノン系の商店経営者などの富裕な家庭の子どもであった。それらの家庭は本を買う習慣があり、子どもも本を購入していた。豊かな階層の子どもほど本が身近で、より多く読書していたのである。

1.2.2 援助に依存する図書施設整備

本を購入できなくても、図書施設があれば子どもは本に触れられる。しかしベナンでは、最大都市のコトヌでも 2012 年時点でいかなる公立図書館もなく、その背景には、ベナンの読書促進活動に対する、2002 年のフランス政府の支援打ち切りがあるという(Sonon 2013:6)。ベナンでは文化政策もフランスに依存してきたことがわかる。

学校の図書室も十分に機能していない。上述の調査では、図書施設をまったく訪れない生徒の大多数が公立学校生で、そのうち半数は学校に図書室があると答えていた(Sonon 2013:4-5)。しかしそうした図書室は狭くて暗く、古い本が積み上げられ、生徒の興味を引かないのだとソノンはいう(Sonon 2013:6)

こうしたなか、読書しようとするコトヌの子どもが足を運ぶのは私立の図書館となる。とくに利用が多いのは、コトヌ最多の資料数を有するアンスティチュ・フランセ(Institut français)[7]の図書館である(Sonon 2013:5)。これはフランス政府が海外でのフランス文化政策の拠点として設置してきた施設で、コトヌには 1963 年に開設された。しかし利用には 3,000～4,000CFA の登録料と、メール・アドレスや住居証明が必要である。こうした条件を満たせる子どもだけが利用できる図書館なのである。2014 年 7

---

[6] 2010-11 年度のユネスコの資料によると、ベナンの初等教育(enseignement primaire)の就学年齢は 6～11 歳である。順に入門課程(Cours d'initiation:CI)と準備課程(Cours préparatoire:CP)で各 1 年、基礎課程(Cours élémentaire:CE)と中級課程(Cours moyen:CM)で各 2 年就学する。中等教育(enseignement secondaire)は前期と後期からなる。前期は 6(sixième)から 5(cinquième)・4(quatrième)・3(troisième)年生の 4 年間である。後期は 2(seconde)・1(première)年生と最終学年(terminale)の 3 年間である。
http://www.ibe.unesco.org/fileadmin/user_upload/Publications/WDE/2010/pdf-versions/Benin.pdf#search='world+data+on+education+2010+%2F+11+Benin'（2015 年 1 月 7 日確認）

[7] アンスティチュ・フランスのインターネット上のサイトでは 25,000 件の紙媒体とデジタルの資料を有するとある。http://www.if-benin.com/mediatheque（2014 年 10 月 15 日確認）

月に筆者が訪れたとき、子ども室の司書アチャデ(B. Atchadé)氏は、約 7,000 冊の児童書があると答えた。コンピュータの不具合で蔵書リストを確認できなかったが、数えてみると、絵本は 800 冊以上備えられ、ERA 出版の絵本は重複も含めて約 100 冊であった。その他のアフリカ出版の本は約 20 冊であった。その他はすべてフランスを主とする欧米出版である。

貸し出しはないが、無料で利用できる図書館もある。元ベナン大統領の親族が運営するジンス基金(Fondation Zinsou)がコトヌに開いたミニ図書館(Mini-bibliothèque)[8]のうち、2009 年にコトヌ中心部に開設された図書館(Mini-bibliothèque Jean Pliya à Gbégamey)の子ども室は、上記の図書館の次によく利用されている(Sonon 2013:5)。筆者が 2014 年 7 月に責任者のオノリーヌ(Honorine)氏に聞き取りをしたところ、ここは公立・私立の学校に囲まれているため、1 日に 100～300 人が訪れるという。2014 年の 5・6 月にはのべ 5,000～6,000 人の初等教育から前期中等教育（15 歳ころ）までの子どもが訪れていた。昼休みや放課後の短い時間に読書するので、短い物語や絵本が人気だそうである。筆者が数えてみると、絵本は約 750 冊備えられ、ERA の絵本は約 50 冊であった。その他ごく少数のアフリカ出版の絵本があった。ただし筆者がその後ジンス基金に英訳の日本の絵本の寄付を申し出てみると、ミニ図書館部門責任者のフランス人女性は、ベナンではフランス語が話されているのだから、フランス語以外の本は必要ないと答えた。ジンス基金がたんに読書の場を提供しているのではないことをうかがわせる対応であった。

ベナンは読書促進策のような文化政策も、フランス政府や私的機関の援助に頼らなければならないのである。砂野も、上述のように個々に分断された独立を果たした旧仏領アフリカ諸国は「貧弱な経済基盤ゆえに、旧宗主国をはじめとする大国や周辺国から自立した自前の制度を立ち上げることがそもそも困難であることが多い」(砂野 2009a:35)と指摘している。ところがその結果、子どもに提供される読書環境は支援提供側の意図と無関係ではありえないのである。

---

8) ジンス基金のミニ図書館は基金の以下のサイトで紹介されている。
http://www.fondationzinsou.org/FondationZinsou/Mini_Bibliotheque.html（2014 年 10 月 21 日確認）

2. ベナンのラリノン・バドと ERA

ベナンを含む西アフリカの旧仏領諸国で子どもが本に出会うことを妨げているのは、以上のような事情である。ではベナンの ERA はこうしたなかでどんな試みをしているのだろうか。以下ではラリノン・バドと ERA の設立について簡単に紹介した後、その

2.1 ラリノン・バドと ERA の創設 [9)]

ラリノン・バドは 1960 年代にベナン中部コリンヌ県(département des Collines)で生まれた。数学、物理学、発達心理学などを修め、1990 年代から 50 作以上の児童書を発表してきた。出版社設立を思い立ったのは、1991 年に自作を出版しようとして、児童書に関心をもつ出版社を国内でみつけられなかった経験からだという。ERA は 1998 年に公式に活動を開始し、2008 年に有限責任会社となった。2013 年までに約 150 冊を出版し、アフリカ内外に配本している。

2.2 ERA の特性と課題

ERA は 1990 年代にサハラ以南アフリカ諸国で複数誕生した小規模出版社の一つである。上述の CEDA や NEA が政府主導で設立されたのに対し、小規模出版社を率いるのは若くて経営能力に富む、多くは作家でもある個人である(Hugues 2008:245/Pinhas 2005:77)。1990 年代にアフリカ諸国で民主化が進行したことも、こうした小規模出版社の設立を促したという(Hugues 2008:245)。西アフリカの旧仏領諸国では既存の出版社の多くが経営不振か休眠状態で、うえのような老舗出版社も主要な出資者がフランスの出版社となるなか、小規模出版社は主体的な出版活動を行える貴重な存在とみなされている(Pinhas 2005:76-77)。ERA も、作品発掘のための創作ワークショップの費用や、本の価格を抑制する補助金はフランス外務省などから受けているが(Tervonen 2003:102-103)、作品の選択や編集を行うのは ERA 自身なのである。

ERA は本と子どもを取り巻く状況も徐々に変えようと取り組んでいる。ベナンの作家、挿絵画家、編集者と協力して「ベナンの児童書週間 (La semaine du livre béninois de jeunesse)」をすでに 16 年間開催しているのである。ラリノン・バドは筆者に、毎

---

9) この項は Beau (2013)、Gandaho (2011)、Tervonen(2003)のラリノン・バドへのインタヴューと、筆者が 2014 年 7 月 23 日に ERA で行ったラリノン・バド氏へのインタヴューからまとめたものである。以下でも、筆者が聞き取った内容は同じインタヴューからのものである。

回都市や地方の 100～50 村を訪れ、クイズやゲームを行い、本をプレゼントすると説明した。本を手にした子どもは大喜びするという。息の長い取り組みで本のおもしろさを伝え、未来の読者を育てようとしているのである。

ERA はまた、大多数の出版物がフランス語である現状にも立ち向かっている。複数の言語が話されているベナンでは、各言語で書かれた本の市場は小さいと思われ、出版は難しいと語るラリノン・バドに筆者が、ではフランス語で出版するしかないのかと尋ねると、「ちがう、私たちだってベナンの言語で本を出版したいのだ」と断言した。そして、識字教室などで母語の読み書きを習得した人々は、その言語で書かれた本を読みたがっており、ERA はすでにフォン語(Fon)[10]の諺の本を準備していると教えてくれた。フランス語の識字能力がない人ほど購買力は低く、この本を誰が買うのかという懸念はあるが、まずは出版して様子をみたいとのことだった。

しかし ERA も資金不足と販売力不足は深刻である。補助金のおかげで抑えられているという本の価格は多色刷りの幼児向け絵本（12 ページ）は 1,000CFA、小学生向けの絵本（24 ページ）は 2,000CFA である [11]。それでもベナンでは 3,000～5,000 部印刷した作品が完売するのに 3～5 年かかるという(Tervonen 2003:103)。他のアフリカ諸国同様、ベナンの書店は大都市にしかないので [12]、出版社は学校行事などあらゆる機会をとらえて販売も行うという(Tervonen 2003:102)。

2.3 アフリカの出版社同士の共同出版

経営上の課題を乗り越えようと ERA が 2001 年から主導したのが共同出版である。これも援助を受けているが、ERA は小規模出版社が支えあって、やがては自立するための方策を初めて示し、実践したのである。最初に参加したのは、コートジボワールの Ebrunie（2001 年設立）、ギニアの Ganndal（1997 年設立）、マダガスカルの Editions

---

[10] 国際 SIL のサイトによると、Fon の言語系統は Niger-Congo, Atlantic-Congo, Volta-Congo, Kwa, Left Bank, Gbe, Fon である。ベナン内ではコトヌを含む南部沿岸に 140 万人(2006 年)の話者がいて、人口の約 17%を占める。フォン語話者の 10%はフォン語を読むことができ、7%は書くことができる。フォン語の辞書、文法書、聖書が編纂されている。
(http://www.ethnologue.com/language/fon （2014 年 10 月 26 日確認）

[11] ERA の 2013-2014 年度のカタログは以下で見ることができる。
http://www.ruisseauxdafrique.com/telechargement/Catalogue-2012-2013%20B.pdf（2014 年 10 月 19 日確認）

[12] フランス文化通信省管轄の「本のもたらす喜び(La joie par les livres)」機構が 2006 年に発行した「青少年向けのアフリカ出版(Edition africaine pour la jeunesse)」という資料によると、ベナンにはコトヌの 3 書店と合わせて全国に 9 書店があるが、いずれも大都市に限られる。

Jeunes Malgaches（1995 年設立）、チュニジアの Cérès（1964 年設立）などであった(Pinhas 2005:81)。ERA のカタログにある 100 冊近い絵本の多くは共同出版である。

アフリカでの共同出版がもたらす利点について、国際独立出版社同盟(Alliance internationale des éditeurs indépendants)[13]のユーグは以下のように述べる(Hugues 2008:250-253)。第一に、著作権料や輸送費などあらゆる費用を共同で支払うので、各社の負担を減らせる。また逆に本の質を上げることができる。第二に、法制の違い、言語と文化の違いをともに乗り越えるうち、出版社間のネットワークや連帯感が生まれる。第三に、このネットワークを通してより多く販売できるので、出版部数を増やせて、一冊の価格を下げられる。実際に ERA は児童書出版数を伸ばしてきた。ベナンの行政上の首都ポルトノボの国立図書館(Bibliothèque Nationale, Porto-Novo)の文献目録によると、法定納本された最初の児童書は第 5 号（2003 年発行：1996-2002 年受け入れ分）に記載された、1999 年出版の ERA の絵本である。2013 年までに ERA の絵本は 115 冊（総数は 127 冊）、物語(Jeunesse Conte)・ジュニア小説(Jeunesse Roman)は 11 冊（総数は 21 冊）が納本された。

しかしこれはアフリカの出版社同士の事業だからこそ得られる利点である。アフリカの複数の出版社とフランスの大手出版社 Hachette のグループ会社 Edicef が 1999 年～2002 年に実施した児童書の共同出版「緑のカメレオン(Le Caméléon vert)」は、アフリカ側の課題を解決するどころか、失望をもたらした。というのもこの事業では、アフリカで選ばれた出版作品の編集やタイトル変更が Edicef だけの判断で行われて作品が損なわれたり、Edicef には収益性がないと判断された作品は出版されなかったりしたからである(Raveglia 2003:108)。またアフリカ側は契約により、作品の一定数の買い取りと自国での販売責任を負ったが(Hugues 2001:247)、Edicef はフランスでの販売努力をまったくしなかった(Raveglia 2003:108)。さらにこの事業では Edicef はアフリカの個々の出版社と連携したうえで、アフリカの出版社同士の連携は許さなかった(Raveglia 2003:108)。アフリカ側は、先進国の読者を基準に作られた本を受け取り、そ

---

[13] 2002 年に組織され、フランスに拠点がある非営利団体。45 か国の 85 出版社で構成される。「作品と思想へのよりよいアクセス、本の多様性の保護と促進に寄与」することを目的とする（国際独立出版社同盟のサイトより(http://www.alliance-editeurs.org/-l-alliance-?lang=fr（2014 年 10 月 2 日確認））)。アフリカの出版社に対しては、とくに共同出版や作品翻訳にともなう法的な問題の解決を手伝うという（2014 年 7 月 18 日の同盟事務所でのエッド(C. Hedde)氏からの聞き取り）。パリの同盟事務所では、ERA のものも含めたアフリカ出版児童書の販売も行っている。

こからはほとんど収益を得られなかったのである。

ラリノン・バドは、「ゆっくりとでも団結し、私たちの小さな市場の境を崩し、共通の目的のために集まること」(Tervonen 2003:103)で将来は援助なしに経営したいと述べている。こうした共同出版で目指されているのは経営上の自立だけではないだろう。圧倒的な資金力や技術力がある先進国の出版社との連携では、アフリカの出版社は従属させられ、力を弱められ、望む作品を出版できない。アフリカ内で共同出版する意義は、アフリカ主導の出版を守ることにもあると考えられるのである。

3. ラリノン・バドの構想と ERA の絵本の特徴

では ERA はどんな児童書を出版しているのだろうか。以下ではラリノン・バドへのインタヴューを通して児童書出版に対する彼女の考え方を明らかにし、それらが ERA の児童書の大多数を占める絵本にどのように読み取れるかをみてみたい。

3.1 ラリノン・バドの児童書出版への考え方

3.1.1 アフリカの文化や歴史を語る本

ラリノン・バドに、本が子どもに果たす役割とはどのようなものかを筆者が尋ねると、このように答えてくれた。

> 本は多くの面で子どもを手助けできる。世界、人生、人間同士の関係を理解する手助けができる。人は怒ったり、満足したり、互いに話したり、話さなかったりもするとわかるのだ。本は子どもが自分のことを少し理解するのを手助けできる。なぜなら子どもは自分の好きなこと、好きではないこと、望むこと、望まないことがわかるからだ。それから気晴らしをしたり、楽しんだりもできる。したがって本は、子ども自身の人格の獲得、構成を助けるのだ。

また彼女は、「子どもは本の人物と同化しながら、自身の不安、喜び、悲しみ、困難を表現できる。したがって本の目的は、子どものこうした心理的成長を促すこと、人間としての構築を促すことだ」とも語ってくれた。彼女は、本はそこに描かれる人物や環境を通して、怒り、喜び、満足、好き嫌い、人への親近感などの感情を伴う体験を子どもにさせ、世界について、他者と関係を結ぶことについて理解するのを助けると考えているのである。

子どもはこうして自分自身について知り、人格を形成していくというのである。

しかし彼女は別のインタヴューで、1990 年代まではアフリカで出版された児童書はほとんどなかったとしている。旧仏領アフリカの書店にある児童書は大多数がフランス出版で、それらがフランス文化を流通させていたという。したがって読書できた子どもは、「自動的に自分のものではない文化と接続することになった」(Beau 2013)と述べる。上述のグギは、植民地支配は「文化を通して、人々が自分自身について、自身と世界の関係について認知する方法を支配」(Ngũgĩ 2005:16) したと述べた。仏領アフリカ諸国では独立後も引き続き子どもは輸入の本を通してフランスの文化に触れ、フランスの文化を通して自分自身について、自分と世界の関係について認知するよう仕向けられたのである。ラリノン・バドは、そのようななかで編集・出版活動を開始した動機は、「アフリカを文化の多様性において、遺産の豊かさにおいて語る本を生み出し、配本することを通して、子どもの情動の育成に参画すること」(Beau 2013)だったとしている。つまりそれまではほとんどなかったアフリカの文化や歴史を語る本を出版し、それらを通して子どもが世界や自分自身を認知できるようにしたいと考えたのである。ところで上述のアンスティチュ・フランセの図書館司書は筆者に、子どもはおもしろい物語ならなんでも読むが、フランス出版の本は自分とつながりがないと感じるようだと語ってくれた。ラリノン・バドが構想するような本は、ベナンの子ども自身に求められているとみられるのである。

3.1.2 二つの指針：自分自身であること／他者に開かれていること

ラリノン・バドの構想はだからといって、アフリカを子どもの想像力の中心に据え、そこに閉じこもらせるというものではない。アフリカの子どもを主人公とした物語を出版する理由について筆者が尋ねると、彼女は、子どもが人物に同化して、「自分自身でいるため、自分自身になるため、自身の価値が開花するためである。子どもが、自分にはアイデンティティがあり、さまざまな根があり、他者とは異なると知るためである。自分にも他者にも文化があり、それは交換しあえると知るためである」と答えた。別のインタヴューでも彼女は、ERA の本が重視するのは、「他者との関係に入る前に自分自身であること」であり、そうでなければ「他者のなかで子どもは自分を見失う」(Beau 2013)と述べている。彼女は、子どもが他者の文化に触れる前に、まずは自分が誰なのかを考えさせ、自分の文化には他者と異なる価値があると知らせたいと考えているので

ある。他者についてはそのうえで、異なるものを交換しあえる相手として意識させようとしているのである。

以上のことは、性教育を主題とした一連の絵本の出版に合わせてラリノン・バドが執筆した解説書、『保護者と教師の読本(*Collection, A la découverte de la vie ; Le livre des parents et éducateurs*)』(Lalinon Gbado & Yaratchaou 2008)にも読み取れる。『読本』が保護者や教師に提示するアドバイスのなかには、周囲の流行や友達に引きずられず、「自分自身でいるよう、自分に適したものを探すよう、本当に自分を感じているよう呼びかける」こと、「他者の生き方に目を開かせること」、「他者を尊重するよう呼びかけること」(Lalinon Gbado & Yaratchaou 2008:26-27)という項目があるからである。彼女は、〈アイデンティティを意識させること〉、しかし〈他者に目を向け、受け入れること〉を児童書出版の重要な指針とし、繰り返し表明してきたのである。

ラリノン・バドはこの指針を、『プールのチーズ(*Le fromage peuhl*)』(Lalinon Gbado & Gbado 2007)という作品に反映させている。これはベナン北部で牧畜をおもな生業とするプール(Peuhl)[14]の女性が作るチーズを取り上げた写真絵本で、プールの人々と文化への作者の深い思い入れと称賛が読み取れる。ラリノン・バドはこれを、「一つのアイデンティティの表明」(Lalinon Gbado & Gbado 2007:3)と述べている。しかし彼女はプールではないのである。それでも幼いころに彼ら・彼女らと親しく接した経験は、自身の「心の起源」(Lalinon Gbado & Gbado 2007:2)の一つだという。彼女はこうして、「自分は誰か」ということは国籍や出身地だけでは示せず、精神上の要素が重要になってくると語りかけているのである。そしてその要素はさまざまな記憶や経験、とりわけ他者との出会いによって豊かなものになると表現しているのである。

『プールのチーズ』はベナンの文化の一側面を取り上げているが、ERA の絵本では伝統的職能集団のアップリケ刺繍[15]や、ベナン人の造形芸術家ザヌ(P. E. K. Zannou)の油絵などが挿絵に採用され、ベナンひいてはアフリカの文化の多様性が示されている。

---

14) フラニ(Fulani)とも呼ばれるが、自称はプロ(Pullo(単数。複数はフルベ(Fulbe))。西アフリカの広範囲に居住する人々で、ベナンには北部を中心に約 10 万人が居住している。多くが牧畜を営み、イスラーム教徒である。(Houngnikpo & Decalo 2013)

15) 現在のベナンにあったダホメ王国では、19 世紀末まで王宮直属の職能集団が、王や首長の旗、幟、傘などにアップリケを施す仕事を担っていた。首長や王は「当時つねに交戦状態にあった近隣諸国との戦いで勝利を収めるたびに、その勝利を祝うため、戦いの様子を物語風に描いた旗を製作させた」(マック&スプリング 1991:88)という。この職能集団は植民地期以降も生き残り、現在では「口頭伝承や現代生活の場面からとった、さまざまな主題」(マック&スプリング 1991:148)を描いているという。

ラリノン・バドはこうして、ヨーロッパの子どもにも、他者に目を開くよう語りかけられないかと模索している。ヨーロッパ人がステレオタイプなアフリカ像によって移民を排斥するなか、ERA の本は一般に流布するものとは異なるアフリカ・イメージをヨーロッパの読者に提示できると述べているからである(Beau 2013)。彼女の構想は移民問題のような現代的な課題にも及んでいるのがわかる。

3. 2 ERA の絵本の特徴

ERA の児童書出版の根底にある、ラリノン・バドの構想や意図をみてきた。以下では、それらが ERA の本にどのように反映されているかを、なかでも多数を占める絵本を取り上げて考えてみる。

3. 2.1 子どもを取り巻く環境を描いた絵本

ERA の絵本にはラリノン・バド自身の作品も多い。彼女に、本の主題をどうやって見つけるかを尋ねると、「私自身が好きなことすべて、目にすること、観察することすべてからだ。それはベナンの文化、遺産である。私がいる環境となっているそうした豊かさである。その環境の中心に、私に語りかける何かがある」と答えてくれた。また、書くときに想定する読者はベナンの子どもだと語った。彼女はまずは好きなこと、身近な世界で伝えるべきことを、同じ世界に生きる子どもに語りかけようとしているのである。ERA の他の絵本もすべてアフリカ出身の作家・画家によるもので、作者自身と子どもがよく知る世界が描かれていると考えられる。ベナンとその周辺国の子どもにとってなじみのある風景、生活様式、自然が描かれ、主題もアフリカの社会や生活から選ばれているのである。ベナンらしいものを取り出してみると、コトヌの風景に不可欠な、黄色いジャケットを着たバイクタクシー「ゼミジャン(zémidjan)」の運転手は、『神聖なへびよ(*Sacré python !*)』(Lalinon Gbado & Alladaye 2008)など複数の絵本に描かれる。また『神聖なへびよ』は、ベナン南部の都市ウィダ(Ouidah)で数世紀来続くへび信仰を守る人物を登場させ、現代生活のなかに生きる伝統文化を取り上げている。『インコとイロコと狩人(*La perruche, l'Iroko et le chasseur*)』[16] (Loucou & Yemadje 2006)などのベナンの伝承も複数出版されている。

---

[16] 「イロコ(iroko)」の学名は Chlorophora excelsa で、熱帯アフリカ特産のクワ科の大木である(堀田他 1991)。物語中では崇拝される巨樹として登場する。

3.2.2 想像力を育てる絵本

ERA の創作物語絵本には『小さな金色のコイ(*La petite carpe dorée*)』(Lalinon Gbado & Djenontin 2011)のように、子どもが物語世界にひたれる絵本がある。編集者として戦後日本の絵本出版に貢献した松居直は、幼い子どもが文字や知識を学ぶためでなく、ただ物語を味わうために絵本を読む大切さを訴えた。「絵本をみながら、ひとり空想にふける時間が、幼い子どもと絵本の世界が一体となるとき」で、それは子どもにとって「真の読書の時間」(松居 2001 :27)だとしたのである。そうした読書体験を与える創作物語として、松居は日本のものでは中川李枝子の作品を評価した。中川の『ぐりとぐら』(中川／大村 1967)などは現在も日本の子どもから高い支持を受けている。松居は、保育士として幼児が生きる現実世界は具体的であることを知り尽くしていた中川が、創作において、「作品に形象されえない部分は思い切って切りすてて」(松居 2001:286)いるとした。西アフリカの旧仏領諸国では、創作物語絵本はすでに多数出版されているが、物語そのものを楽しむための作品は少ないようである。コートジボワールのケイタの『青色の男の子(*Le petit garçon bleu*) 』(Keïta 1996)はユネスコなどから賞を受けた作品である。しかし人種差別という主題を伝えようとして、情景が説明的に書き込まれすぎ、物語を味わうことをやや難しくしている。いっぽう『小さな金色のコイ』は、簡潔だがイメージをふくらませる表現で書かれている。これは湖畔の魚市場で小さなコイをもらったハビブが、コイは母親に料理されてしまうのではと心配し、コイの夢を見る物語である。夢の中でハビブとコイが見た情景はただ、「ふたりは橋が湖をまたいでいる場所にやってきました。そこでふたりは水からあがり、岸辺にすわりました。いっしょに、眠る町にそそがれるやわらかな光をうっとりとながめました」(Lalinon Gbado & Djenontin 2011:14)とだけ描写される。ここには子どもが人物の経験を自由に空想する余地が残されているのである。

こうした読書を支えているのが『小さな金色のコイ』のジュノンタンの挿絵である。ジュノンタンは物語に忠実に場面を描きこみ、ハビブのシャツの色を最後まで統一して、彼が絵のどこにいるかを即座に見分けられるようにする配慮もしている。松居は、絵本の挿絵はただ「物語の世界を子どもの中につくりだ」(松居 2001:34)し、子どもが物語を最後までたどる手助けをするためにあるとした。しかし西アフリカの旧仏領諸国の絵本では、ブルキナファソの創作物語絵本の草分けであるイエンの作品『ムカと白人の飛行機(*Muka et le petit avion du blanc*)』(Hien & Kou 2006)のクーの挿絵のように、物

語の豊かさを描き切れていないと感じられる平板な挿絵も見受けられるのである。『小さな金色のコイ』は物語の中をゆったりと旅できる文と挿絵で構成され、自分自身について、世界について探究する子どもが目に見えない世界を想像する力を育てる本だと考えられるのである。

3.2.3 社会的問題を知らせる絵本

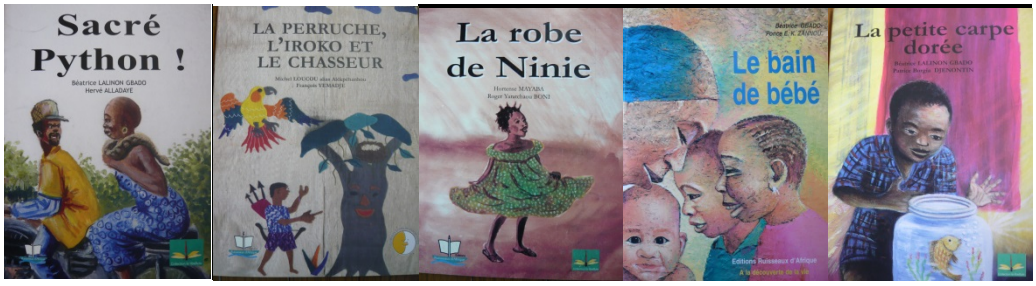
ERA は絵本で、現代アフリカが抱える具体的な問題を取り上げている。たとえば貧困を主題とする『ニニのワンピース(*La robe de Ninie*)』(Mayaba & Boni 2002)は、成績優秀賞の授与式のために着る服がないと悩む少女ニニの物語である。また「子どもと健康シリーズ(Collection Enfant et Santé)」では、医師など専門家の監修のもとで書かれ、疾病や衛生の知識を授ける一連の絵本 12 冊（2013 年時点）が出版されている。そこには HIV/ AIDS を取り上げた『ナイマはエイズではありません(*Naïma n'a pas le sida*)』(Kipitime 2010)や、白皮症を取り上げた『マルクおじさん(*Tonton Marc*)』(Darboux & Gigot 2004)といった作品もあり、病気への偏見や差別について読者に考えさせている。これらの絵本は、さまざまな困難があるアフリカの人間であることについて、子どもに意識させたり、知識を授けて心の準備をさせたりしていると考えられるのである。

3.2.4 性教育の教材絵本：大人たちに協働を呼びかける

ERA は、「生命の発見シリーズ(Collection à la découverte de la vie)」として、性教育を主題とする絵本を 2013 年までに 15 作品出版してきた。ここに含まれるのは、植物や生物の再生産の仕組みを教える絵本や、『赤ちゃんの沐浴(*Le bain de bébé*)』(Gbado & Zannou 2004)のように、男女の身体の仕組みの違いや生命誕生の不思議について語る絵本である。ラリノン・バドは筆者に、今日の子どもはテレビや友達との会話などで性について知識をえてしまうため、「性は自然なことだ」と教え、大人には性教育の手段を提供しているのだと説明した。現在では成人儀礼を通して性教育を受ける機会が徐々に失われ、大人は対処に悩んでいるというのである。

このシリーズの特徴は、すでに紹介した『保護者と教師の読本』で保護者や教師に協働を呼びかけていることである。筆者のラリノン・バドはこのシリーズは、「子どもたちの性教育を根底で支える対話を引き起こし、その対話を維持しつづけることが目的」(Lalinon Gbado & Yaratchaou 2008:13)だと説明する。ERA はこの問題を保護者や教

師と共有し、議論を支える役をかってでているのである。ERA はこうして、社会的な問題に対して出版社として果たせる役割を担おうとしているのである。



左から『神聖なるヘビよ！』『インコとイロコと狩人』『ニニのワンピース』『赤ちゃんの沐浴』『小さな金色のコイ』

4. むすびに

ベナンを含む西アフリカの旧仏領アフリカ諸国では、植民地期の言語政策と教育の影響、独立後も続いたフランスとの緊密な連携関係のため、フランス語を公用語として使いつづけている。フランス語は、行政や教育といった社会の公的な分野全般で使われる書き言葉であり、教科書をはじめ子どもが手にする本の大多数がフランス語である。しかし実際にはこの言語は国民一般に普及していないのである。またたとえ就学した子どもが本を読もうとしても、本は高価である。ベナンの例では、図書館や学校図書室も十分に整備されていない。このため読書できるのは富裕な家庭の子どもに限られているのである。ベナン政府は政策的にこれに対処する財政基盤がなく、おもにフランス政府や裕福なベナン人の私的な基金が支援している。しかしそうして提供された図書館は、結局はフランス語とフランス文化に触れる場となっているのである。

西アフリカの旧仏領諸国では国内出版社も経営の困難を抱えている。市場規模が小さいうえ、収益性のある教科書市場をおもにフランスの大手出版社に奪われているので、まさにそのフランスの出版社に依存しなければ経営を維持できないのである。ラリノン・バドと ERA はこうしたなか、まだ資金面で先進国や援助機関に依存しているとはいえ、アフリカの出版社同士の共同出版を主導して自立経営を目指し、自ら主導する編集・出版事業を行ってきた。こうしてベナン及びアフリカの読者に向けて出版しようとしているのである。

ERA がこうして実現してきたのは、子どもが身近な環境を通して世界や自分自身を理解できる本、アフリカ人やベナン人であるとはどういうことかを考えさせてくれる本、しか

し内向きにアイデンティティにしがみつくのでなく、他者に開かれた意識を育てる本の出版である。現状ではフランス語以外の言語で出版することは困難で、ラリノン・バドも語ったように ERA は葛藤も抱えている。それでも ERA は、植民地期以来、就学した子どもがフランス文化だけを通して自分と世界の関係を認知するよう強いられてきたこの地域において、出自文化とその歴史からの視点で現実をとらえるよう子どもを促す一歩を踏みだしたのである。それだけでなく ERA は読書促進活動を行い、大人たちとともに現代の子どもの問題にも取り組もうとしているのである。さらにはヨーロッパの子どもの想像力に語りかける本を出し、アフリカ全体に関わる課題にも対処しようとしているのである。共同出版によって、まだ不完全で小規模とはいえ、アフリカの出版社が主導権を握って児童書を出版できるようになれば、子どもの精神世界と、子どもを取り巻く社会全体に働きかけることができるだろう。アフリカの出版社がアフリカの子どものために出版する意味はこうした点にあるだろう。出版社同士の連帯を強める共同出版は、この事業を参加出版社の国に拡大する可能性も秘めている。ERA が出版するような本によってアフリカの子どもが自分自身を認知する方法を変えていくなら、フランス語が主要な書き言葉であるのがあたりまえの現状、国内出版や読書環境整備を政府主導でなく支援に依存する現状に対する子どもの見方にも影響を与えていくと考えられるのである。

参考文献（日本語）

楠瀬佳子．2011.「世界の絵本　アフリカ諸国」中川素子／吉田新一（編）『絵本の事典』pp. 288-291. 朝倉書店.

砂野幸稔．2009a.「アフリカの言語問題―植民地支配からひきついただもの」梶茂樹・砂野幸稔（編著）『アフリカのことばと社会』pp. 31-63. 三元社.

―．2009b.「拡大するウォロフ語と重層的多言語状況の海に浮かぶフランス語―セネガル」梶茂樹・砂野幸稔（編著）『アフリカのことばと社会』pp. 127-159. 三元社.

中川李枝子／大村百合子．1967.『ぐりとぐら』福音館書店。

中村光弘．1994（1982）.『アフリカ現代史Ⅳ　西アフリカ』山川出版社.

平野千果子．2002.『フランス植民地主義の歴史　』人文書院.

堀田満他（編集）1991.『世界有用植物事典』平凡社。

松居直．2001(1973).『絵本とは何か』.　日本エディタースクール出版部.

マック、ジョン&クリストファー・スプリング．1991.『大英博物館所蔵品によるアフリカの染色』吉田憲司／内海涼子（監訳），京都国立近代美術館.

村田はるせ．2013.「アフリカの子どもための文学　サハラ以南アフリカのフランス語で書かれた児童文学とヴェロニック・タジョ」『スワヒリ＆アフリカ研究』No. 24、121-140.

参考文献（欧文）

Dadié, Bernard Binlin. 1973 (1966). *Légendes et poèmes, - Afrique debout !, Légendes africaines, Climbié, la Ronde des jours*. Paris, Seghers.

Hien, Ansomzin Ignace & Lougué Kou. 2006. *Mouka et le petit avion du blanc*. Ouagadougou, Découvertes du Burkina.

Houngnikpo, Mathurin C. & Samuel Decalo. 2013. *Historical Dictionary of Benin*. Hanham / Tronto / Plymouth, UK, The Scarecrow Press.

Hugues, Laurence. 2008. « Les coéditions panafricaines : Quels enjeux pour la littérature de jeunesse en Afrique francophone subsahariene ? » *Situations de l'édition francophone d'enfance et de jeunesse*, 243-255, Paris, L'Harmattan.

Keïta, Fatou. 1996. *Le petit garçon bleu* . Abidjan, NEI.

Ki-Zerbo, Joseph. 1978. *Histoire de l'Afrique noire*. Paris, Hatier.

Mouralis, Bernard. 1984. *Littérature et développement ; Essai sur le statut, la fonction et la représentation de la littérature négro-africaine d'expression française*. Paris, Silex.

Ngũgĩ Wa Thiong'o. 2005 (1986). *Decolonising the Mind*. Oxford, James Currey, Nairobi, EAEP, Portsmouthe (NH), Heinemenn.（グギ・ワ・ジオンゴ．　1987.『精神の非植民地化』宮本正興・楠瀬佳子訳，第三書館.）

Pinhas, Luc. 2005. *Editer dans l'espace francophone ; Législation, diffusion, distribution, et commercialisation du livre*. Paris, Alliance des éditeurs indépendants.

Raveglia, Audrey. 2003. « Caméléon vert, ou l'ambiguïté d'une coédition Nord/Sud » *Africultures*, 57, 107-108.

Tervonen, Taina. 2003. « Sur le chemin de l'endépendance, entretien avec Béatrice

Lalinon Gbado, directrice des Editions Ruisseaux d'Afrique (Bénin) » *Africultures*, 57, 101-103.

参考 URL

Beau, Nathalie. 2013. « De Ruisseaux d'Afrique à Ruisseaux du monde : Rencontre avec Béatrice Lalinon Gbado » dans *Takam Tikou*, le 20 mars 2013. http://takamtikou.bnf.fr/dossiers/dossier-2013-patrimoine-et-transmission/de-ruisseaux-d-afrique-ruisseaux-du-monde （2014 年 6 月 29 日確認）

Gandaho, Elisabeth. 2011. « Béatrice Lalinon Gbado : La figure émblématique de l'univers littéraire au Bénin » in *Fraternité*, le 6 janvier 2011. http://www.beninsite.net/spip.php?article1346 （2014 年 7 月 10 日確認）

Sonon, Stéphane. 2013. « Jeunesse et bibliothèque en milieu urbain en Afrique : cas de Cotonou (Bénin) » *INFODOC*, Juillet-Décembre 2013, 4-9. http://www.adadb.bj.refer.org/IMG/pdf/Infodoc_2013_Juil-Dec.pdf#search='bibliotheque+publique+benin' （2014 年 7 月 6 日（日）確認）

参照した Editions Ruisseaux d'Afrique 出版の絵本

Darboux, Raphaël & Hervé Gigot. 2004. *Tonton Marc*.

Gbado, Beatrice & Ponce E. K. Zannou. 2004. *Le bain de bébé*.

Kipitime, Dossou Paul. 2010 (2e édition). *Naïma n'a pas le sida*.

Lalinon Gbado, Béatrice & Hervé Alladaye. 2008. *Sacré python !*.

Lalinon Gbado Béatrice & Patrice Borgia Djenontin. 2011. *La petite carpe dorée*.

Lalinon Gbado, Béatrice & Alexandre et Béatrice Gbado. 2007. *Le fromage peuhl*.

Lalinon Gbado, Béatrice & Roger Boni Yaratchaou. 2008. *Collection, A la découverte de la vie ; Le livre des parents et éducateurs*.

Loucou, Michel alias Alékpéhanhou & François Yemadje. 2006. *La perrouche, l'Iroko et le chasseur*.

Mayaba, Hortense & Roger Yaratchaou Boni. 2002. *La robe de Ninie*.